

〔中国工芸の精華展によせて〕

館蔵 銀鍍金宝相華文大鏡について

中国工芸の中で、特に重用されてきたものに金属器が挙げられます。美しい青磁や白磁を生み出し、技術の先端を築いてきた陶磁器でも、常に金属器を追い求め、器形や文様をうつして発展してきた背景があります。館蔵品に見てみると、「緑釉博山炉」（後漢時代）は同時代の金銅製博山炉と同形をなし、時代が下って「黃地紫彩花卉人物文尊式瓶」（挿図1 明時代）は古代殷周時代の青銅器「尊」の器形を象っています。また、宮廷において全面的に陶磁器が使用されるようになるのは明時代からで、もともと最高位の器として使用していた金銀器から、儉約のために陶磁器を使用するようになります。『大明会典』卷五十九・房屋器用等第では、「公侯一品・二品、酒注酒盞用金、餘用銀。三品至五品、酒注用銀、酒盞用金、六品至九品、酒注酒盞用銀、餘皆用磁漆木器、不許用硃紅及稜金描金彫琢龍鳳文。庶民酒注用錫、酒盞用銀、餘磁漆。」とし、身分に応じて用いることのできる器の材質を定めています。三品から九品の位の人には酒注と酒盞以外は皆、陶磁器か漆器、木器を、庶民は酒注と酒盞以外は陶磁器か漆器を用いることとしています。官吏でも磁器の使用が定められていることがわかります。宮

挿図1



廷内での陶磁器の使用によって、官窯が統制され、陶磁器の地位も上がります。同時にこの資料からは、明時代までいかに金属器、特に金銀器が重用され、また権力を示すものとされていたかがうかがえます。

金属器には素材によって主に金、銀、銅、それらの合金など様々な種類がありますが、やはりその輝き、希少性などから金ももっとも高価とされてきました。しかし金属器が盛んに作られ、それらが数多く残存しているのは唐代に入ってからです。それ以前、古代には青銅器が主であったといえます。唐代の金銀器は、何家村窖藏（陝西省西安市）出土品や法門寺地下宮（陝西省扶風県）出土品などに優雅で且つ力強い作風の優品の数々が見られます。

大和文華館所蔵品の中からは、唐時代の薫り高い風潮を今に伝える作品として、「銀鍍金宝相華文大鏡」（挿図2）を紹介致します。本品は口径21.8cm、高さ7.2cmとやや大きめの碗です。銀製の器の表面に文様を線刻し、文様部に鍍金を施しています。器体は鍛造により、高台部分は別造りを鍍付けしています。高台、器部共にやや外に広がる器形で、底部から口縁部にかけては、緩やかな膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部で外反する美しい曲線を描いています。同様の器形は何家村窖藏出土品にも見られ（挿図3「銀鍍金宝相

挿図2



華团華文蓋碗」唐時代 中国・陝西歴史博物館蔵）、蓋を伴っていることから、本品ももとは蓋があったことが知られます。何家村出土の碗は底部からの立ち上がり文華館のものよりもややきつく、口縁部で外側に湾曲しているようですが、大きさは本品とほぼ同じで、やはり線刻した宝相華文部分に鍍金を施しています。

再び大和文華館蔵の碗に戻ります。文様は、数種の植物文の複合によって生まれた空想の花である宝相華文を用いて、器の見込み中央には枝が円を描くように、側面には横方向に一巡して配され、その花卉をつなげた花卉文を口縁の内外及び高台脇、内面の宝相華文の周囲に巡らせています。側面の宝相華は花が交互に開きながら巡りますが、連続文様ではなく、途切れた枝先が見られることで一枝とわかります（挿図4：筆者描き起こし部分図）。折枝文と称される枝先が認められる植物文は、割かれた枝によって折り取った状態を描く描写などは見られますが、本品のような縦巻き状の枝先は珍しい表現です。同じく唐代の作と考えられる「鳥獸花背方鏡」（挿図5：部分図 正倉院蔵）は方形の海獣葡萄鏡で、鏡背文様には葡萄唐草文の中に獣や鳥などが自由な姿態であらわされています。この葡萄文は大きな円形を描きながら波状に展開し、始点はありませんが、小さい蔓が渦を描きながら所々に枝分かれして伸びています。鏡背文様は陽鑄によってあらわされていますが、三〜四重に堅く縦に巻き、細い枝先が尾のように伸びる蔓の特徴をよく捉えたこの図様は、「銀鍍金宝相華文大鏡」に刻まれた宝相華の枝先とよく似ています。宝相華文を

挿図3



形作った植物文には葡萄文や蓮華文などが考えられており、方鏡の図様と宝相華の成立過程を考慮に入れると、このような表現が出てくる背景には葡萄文の蔓先の図様が考えられます。本品の宝相華という想像上の華麗なモチーフの中にも、写実性に近づく要素が垣間みられます。

宝相華文と花卉文は蹴彫りにより線刻されているため、楔形の刻みの連続が線を成しています。力強い線刻による大らかで堂々とした、豊かな作風は、唐代の優れた金工に見られる大きな特徴の一つといえます。蹴彫り型を立てて打った長い線が花卉の先端を囲むように密に並べられている様子は、花卉の色合いが変化する様子をあらわしているようにも感じられます。宝相華文の間には、余白を充填するように魚々子（小さい円形を刻む鑿）が横位の方向またはモチーフに沿って蒔かれています。この魚々子によって、宝相華の文様はより明確になり、また、リズムカルで華やかな雰囲気をつくり出しています。（瀧朝子）（挿図3は『中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝「唐皇帝からの贈り物」』展図録、新潟県立近代美術館・朝日新聞社・博報堂、1999年より、挿図5は米田雄介著『正倉院宝物と平安時代一和風化への道』淡交社、2000年より複写させていただきました。）

挿図4



挿図5



季刊 美のたより No.148

平成16年10月9日

発行 大和文華館